

業 界 短 信

(20年11月1日～11月30日)

豊鋼材工業、新生産管理システムが稼働（鉄鋼新聞、11/4）

豊鋼材工業(株)（福岡県糟屋郡、木村昭夫社長）は、新しい生産管理システムを開発。本格運用を開始した。新システムは、これまで検索できなかった情報を、リアルタイムで検索できるほか、文字中心だったデータを図案化し、情報の見える化に寄与する。これにより、同社は業務効率が50%以上は上がると期待している。

三和鉄鋼、犬山のスリット加工強化（鉄鋼新聞、11/4）

三和鉄鋼(株)（愛知県海部郡、川口克彦社長）は、犬山工場スリッター部門の生産性向上に向けた設備改造や新技術導入などを継続的に行ってきたが、刃物仮組み装置一式を導入して10月から本格稼働を開始、同分野の生産合理化計画が完了した。これにより生産性は従来比35%向上した。同社は、飛島工場と犬山工場の2拠点体制で、スリッター、レベラー、厚板溶断、線材保管業を手掛ける。現在、月間6千～6500トンペース。

芝浦シャリング、山形の第3工場本稼働（鉄鋼新聞、11/5）

芝浦シャリング(株)（大川昌巳社長）は、山形工場で昨秋に購入した隣接地（約2800平方メートル）を新たに第3工場とし、このほど本格的な活用を開始した。加工製品の一時保管に加え、ロール矯正機や旋盤を設置。近いうちにオートボーラやラジアル盤も移設して、機械加工部門を集約する考えだ。これによ

って、既存の屋内スペースが広がるため、ジャストインタイム・デリバリーが要求される製品置場として活用。超短納期対応力やセット納入力を強化する。また、同社の山形鋼板部・山形工場では月産2千トンの切板加工をコンスタントにこなす設備体制を構築した。昨年に出力6KW発振器を搭載した大型レーザを増設したのに次ぎ、今春大型プラズマを導入。ガス、プラズマ、レーザをそれぞれ2基ずつ保有したことで板厚、形状、ロットなど幅広い受注内容に対し、納期対応力を高めた。

リバースチール、厚板溶断加工増強（鉄鋼新聞、11/17）

リバースチール(株)（横浜市磯子区、塚越健次社長）は、厚板溶断の生産性を向上した。開先加工機能付き大型プラズマを導入したことによる。ガス、プラズマ、レーザが揃い、薄物から厚物、小物から大単重まで板厚、納期、加工内容に応じ幅広く対応できる体制にした。今回導入したプラズマは切断幅3.2メートル×切断長さ21.2メートルの定盤に設置。1カットで6～32ミリまで加工できる。

経産省、中小企業支援を強化（産業新聞、11/19）

経済産業省・中小企業庁は、年末年始の資金繰りをにらみ、原材料価格高騰対応等緊急保証制度（セーフティネット保証）を通じ、中小企業支援を強化する。緊急保証枠は利用枠6兆円を3倍額の20兆円に拡大、対象業種は、11月13日に73業種を追加、全国の中小・小規模企業260万企業をカバーする、618業種に広げられた。セーフティネット貸し付けも貸付枠を3兆円から10兆円とし、併せて30兆円の枠を確保した。鉄鋼業関連では「鉄鋼シャースリット業」、「鉄鋼卸売業」、鉄スクラップ卸売業」などが対象業種となっている。セーフティネット保証制度は本年10月31日から従来の緊急総合利用枠、対象業種を拡大してスタートした。業種指定期間は2010年3月31

日まで。

青柳鋼材興業、切板の矯正加工能力拡充（鉄鋼新聞、11/20）

青柳鋼材興業(株)（千葉県船橋市、高橋雅雄社長）はタイヤホイール部材用切板の受注増と、平坦度品質・精度要求に対応するため、船橋工場に歪み取りプレスを設置した。溶断で生じる熱歪みを矯正する。浦安工場と合わせ、両肺体制を確立。これまでは船橋で溶断した切板も浦安で矯正していたが、ヨコ持ち負担をなくし短納期対応力を高めた。ホイールは部材加工段階でシビアな品質・精度が要求され、ゴマ粒程度のかすり傷程度でも不良品の対象となる。同社は、鉱山用大型ダンプや特殊仕様建機といった非量産向けが主体。

三原商事東濃金属、穴あけ設備を更新（産業新聞、11/21）

(株)三原商事東濃金属（岐阜県可児市、三原吉城社長）は、本社及び関東工場の穴あけ設備計6基のリプレースを11月初旬までに終え、稼働を開始した。本年夏に本社工場で実施したレーザと合わせ、全社的な効率の向上、納期対応力の強化を図った。穴あけ設備は、全社で計52基保有しており、各設備を約10年周期で順次、新鋭設備に入れ替えている。

栃木シャーリング、新工場が本格操業（鉄鋼新聞、11/26）

栃木シャーリング(株)（市川稔社長）は、総額28億円を投じて進めていた大和田産業団地内への本社・工場全面移転が10月までに完了。このほど新工場での本格操業を開始した。今回、隣接する大和田産業団地内に敷地4万2千平方メートルを確保し、工場建屋（約1万7千平方メートル）と本社事務所棟を建設。今春に着工、9月からの順次移管に先駆け、8月には塗装工場が完成している。溶断工程には新たに最新鋭の大型レーザ2基を導入し、移設分と合わせ計6基に。プラズマも1基新設し2基とした。NCガスは2基とも移設。切

断能力は月産2千トンとなった。

日鉄神鋼シャーリング、ドリルマシンを新設（鉄鋼新聞、11/26）

（株）日鉄神鋼シャーリング（大阪市此花区、木村秀明社長）は、来年4月稼働予定で、ドリルマシン1基を新設し、精密穴開け加工を開始する。母材倉庫増築工事が3月完工予定で進められており、これにより生じる工場の空きスペースを利用してドリルマシンを設置する。加工度の向上に加え、切板の切断時間短縮などの生産性、さらに歩留まりの向上も狙う。同社の今年上期の生産量は約3500トンで、厚板の母材在庫は常時2千～2500トン。主な用途は橋梁が約6割、鉄骨約4割となっている。

芝浦シャーリング、土浦加工工場が稼働（産業新聞、11/28）

芝浦シャーリング（株）（東京都港区。大川昌巳社長）の土浦加工工場がこのほど竣工し、今月から稼働開始した。投資額は約15億円。建設機械用の部材を扱う土浦事業部の鋼板加工部から加工部門を独立。鋼板工場近隣の約5000坪の自社所有地を用地として、今年4月に着工。既設の1000トンプレス機や二次加工機を移設したほか、2000トンプレス機を新設した。超大型油圧ショベル用などの部材加工まで対応領域を広げる。

原シャーリング、レーザ切断機が本格稼働（鉄鋼新聞、11/28）

原シャーリング（株）（東京都江東区、原敏博社長）では、今週からレーザが本格稼働した。従来は外注委託していたレーザ指定切板を内製化するほか、建築・土木の新規開拓にもつなげる。既存のガス、穴あけドリル、丸鋸盤に、レーザが加わり、注文内容に応じた効率的な加工設備の選択が可能に。これまでは客先からのレーザ指定注文については全量を外注委託していたが、これを内製化し、6～12ミリをレーザ化、それ以上はガス溶断に棲み分ける。同社は建築・

土木向けを中心に月産 500 トン前後の切板加工を手掛ける。

三井物産厚板加工、形鋼切断加工に進出（産業新聞、11/28）

三井物産厚板加工(株)（岡山県玉野市、瀧康雄社長）は、新規事業として、形鋼切断用ヤード及びアングルベンダー設備を整備し、本年9月から稼働を開始した。形鋼の切断能力は月産400トン。厚板と形鋼を合わせた切断加工能力は今回の整備で約3400トンとなる。この新事業展開により、造船用ブロック材料として、厚板と形鋼の切断加工品の一式まとめた供給が可能になり、顧客サービスの向上が図られる。同社は、今後予想される形鋼の陸送規制強化も視野にいれ、海上荷役の強みをさらに発揮したい考えで、三井物産グループの瀬戸内地区の造船用鋼材加工拠点として、さらなる機能の深化を図る。